門を八文字に開いて出て參りましたのが乙姫様の腰元、頭は眼鏡の様な髷に結ひまして身には猩々緋の筒袖を着て手には唐團扇の柄の長いのを持つて居ります。大勢連ツつて出て參りました。

「ヤア〳〵それへ來給ひしは丹後の國は與謝郡水江の里の浦島殿に候はずや、乙姫様のお待兼妾に從いて來給へ〳〵」

「アヽモシ私は其んな者と違ひます。今船から金子を落して拾ひに來ました者だす」

「アイヤお隠しあるな豫てより見覺へ置きし額の黒子、妾に從て來給いのう」

「そんならそうしようかいなア」

づぼらな男で其儘腰元に從いて奥の間の乙姫さんの目通りへ出ました。種々の御馳走を戴いて居ります。其の後へ來ましたのが正眞の浦島、頭は彈き茶筅身には熨斗目の着附に腰簑を附けまして

片手に釣竿、小脇に玉手箱を抱へて緣毛龜に乘りまして波を蹴立て沖を遙にズウ……と（鳴物水音）長唄浦島〳〵海原や波路遙と夕凪に、龍の都を出潮の寄るも八十の浦島が〳〵（此間振事）

正眞の浦島が來たと云ふので龍宮中は大騒ぎをして居ます。右の男は乙姫さんから玉手箱を戴きまして裏の水門から逃して貰ひましたが邊りは一面に眞赤ゐけ

「とうない赤い處やなア、ア、解つた偖ては音に聞く珊瑚珠畑やなア」（鳴物色めき）

「大阪への土産に珊瑚珠を持つて歸いたろ、一本三十兩の値價は有る二本で六十兩三本で九十兩四本で百二十兩五本で珊瑚珠の百五十兩や……」

洒落を云ふて居りますと、其處へ出て參りましたのが龍宮の代官で河豚腸蝶安、頭に河豚を冠つて手先を連れて參りました。此手先が種々の魚を冠つて居ります。鰯に鯊、鯨、鯖、鰆、鰺、鱚、鰤、鰹と色々の魚が遣つて參りました。

「やあ〳〵者供參れ〳〵……」

上るり〳〵かゝる處へ河豚腸蝶安家來引連れ出きたる〳〵のり「ヤア〳〵僞浦島、汝が所持なす珊瑚珠、いざこざなしに渡せばよし、否ぢやなんぞと吐せば最期、搦捕取ふや返答は、さあ、さあ、さあ〳〵〳〵僞浦島返答はイヤなんとなんと」

〳〵なんと、なんとと詰寄つたアり、浦島フツと吹きだし〳〵

のり「ウムフ、ヘーヘウムフム、ヘヽヽヽヽ、オヽ宜い處へ河豚腸蝶安、汝等一疋食ひ足らねど、此浦島が腕の細葱料理あんばゐ食つて見よやい」

上るり〳〵大手を擴げて身構へたり〳〵

「それ者供打て捕れい」

「ホウ……」（鳴物打込）

「イヤどつこいしよ」（立廻り）

唄〳〵霞む梢に移香散りて〳〵

「これは到底もかなわん」

珊瑚珠を杖に逃げ出しました。

「これわいさのさ……」（鳴物）唄〳〵うつゝ白波、幾夜が戀に、なれし情も、今ではつらや一人寢のほんに思へばさりとわさりとわ、昔戀しき、波枕さざめなや〳〵

「アヽ辛度やの、此處まで逃げて來たら大丈夫や」